

私にだけ執着する天然
でスパダリなたぬき獣
人のオスに転落人生から
救われて番なろ？と囁
かれながら毎晩トロト
ロに開発されちゃうお話

なぎさ

なぎさの妄想部屋

文庫版 / 体験版

第一章 転落

森の木漏れ日が、まだ温かった頃の話だ。

私——マオは、群れの中でそれなりに注目を集めるメスだった。艶のある毛並みに、よく通る目鼻立ち。何より健康そのもので、走れば誰より速く、木の実を見つける嗅覚も鋭い。

最近、成人の儀を迎えた。いつ発情期が来てもおかしくない歳になった、ということだ。たぬきの掟は一夫一妻で、一度番（つがい）を決めたら生涯をともしにする。だからオスたちは、発情期を前にしたメスの前で必死だった。自分こそがふさわしいと力を誇示し、贈り物を運び、時には他のオスとぶつかり合う。

そんな光景を、私は少しだけ高い場所から眺めていた。

ふふ、今日も来てる。

巣穴の前にずらりと並んだ木の実や、川で獲れたばかりの小魚は、私の気を引くための貢ぎ物だ。オスたちはそれぞれに胸を張り、尻尾をぴんと立てて、少しでも自分を大きく見せようとしている。悪い気はしなかった。むしろ、心のどこかで誇らしかった。

私は選ばれる側なんだ、と。

天狗になっていたと言えそうかもしれない。でもあの頃の私には、それが当然の世界だった。私はオスたちの視線の中心にいて、いずれ最良の番を選ぶんだと、疑いもしなかった。

だけど——そんなものは、あっけなく崩れた。

あの日のことは、今でも鮮明に覚えている。崖沿いの細い獣道

を、いつものように軽い足取りで駆けていた。目を瞑っても歩けると思いうくらい見慣れた道だったから、油断した。

雨上がりで濡れた岩に足を取られたのは一瞬だった。体が宙に浮き、視界がぐるりと回転して——気がついた時には、崖下の岩場にうつ伏せに倒れていた。

右足に焼けるような痛みが走って、見下ろすと足があり得ない方向に曲がっていた。息が止まった。

群れの年長者が薬草を当ててくれたおかげで化膿は免れて、命はとりとめた。けれど傷は深く、「完治するかはわからない」と、年長者は目を伏せた。

その言葉が何を意味するか、すぐにわかった。
ああ、終わったんだ。

怪我をしたメスは足手まといになる。満足に走れないし、狩りもできない。子を守って逃げることにすらできないメスと番になっても、オスには何の利点もない。

最初に離れていったのは、一番熱心だったオスだった。見舞いにすら来ず、翌日には別のメスの巣穴の前に見覚えのある木の実を積んでいるのを見た。

二番目のオスは一応顔を出したけれど、目が泳いでいた。「大丈夫か」と言いながら、私の体ではなく足ばかりを見ている。値踏みして、損得を計算するような目。それきり彼も来なくなつた。

三日もすれば、貢ぎ物を持ってくるオスは一匹もいなくなつた。まあ、そうだよね。

悔しくて泣きたかつたけれど、同時に理解もできた。彼らは私

自身に惹かれていたわけじゃない。「健康で毛並みがよくて、子をたくさん産めそうなメス」という条件に惹かれていただけ。条件が崩れれば去るのは、当然のことだ。むしろ、あの貢ぎ物の日々を愛情だと思い込んでいた自分が滑稽だった。

群れの中での私の立場は、みるみる変わっていった。声をかけてくれる者が減り、視線は同情から無関心へ、やがて微かな蔑みへと変わっていく。「あの娘、可哀想にね」——そんな囁きが耳に届いた日、私は群れの端へと巣穴を移した。誰の目にも留められなくなかった。

それでも——野垂れ死ぬのは嫌だった。

一生番ができないとしても、この足が二度と元通りにならないとしても、生きたいと思った。大した理由なんてないし、希望が

あるわけでもない。ただ、こんなことで終わってたまるかという意地だけがあった。折れかけた足で立ち上がるように、折れかけた心を何とか支えていた。

笑いたければ笑え。でも、私は生きてやる。

それからの日々は、ただ生き延びることだけが全てだった。

足を引きずって森を歩いて、まともに走れないから獲物なんて捕まえられない。他の獣が食い散らかした残骸に辿り着ければ運がいい方で、大抵は干からびた木の実や虫食いの根菜を掘り返して飢えを凌いだ。

水場に映る自分の姿を見て、息を呑んだことがある。あれほど自慢だった毛並みはすっかり色褪せ、肋骨が浮き出て、目だけがぎらぎらと飢えた光を宿していた。

これが、私。

目を逸らしたくなつたけど、逸らさなかつた。これが現実なら、受け止めるしかない。

正直、つらい。体も心も限界が近い。

それでも、まだ。

怪我をしてから、どれくらい経つただろう。季節がひとつ分は過ぎた気がする。

その日もいつものように足を引きずって食べ物を探していたけれど、もう何日もまともに食べていなかった。腹の中は空っぽで、視界が時折ぐらつく。膝が笑って、一歩踏み出すたびに足の傷が軋む。

——そろそろ、まずいかもしれない。

弱気になりかける心を、齒を食いしばって押し戻す。まだ諦めない。次の茂みに何かあるかもしれない。その次に、きつと――。
がさつ

背後の藪が鳴って、心臓が跳ねた。

反射的に振り向くと足が悲鳴を上げたが、構ってられない。敵だとしても逃げられないのはわかっている。それでも牙を剥く準備だけはした。

茂みを割って現れたのは、見たことがない顔の一匹のオスだった。この辺りの群れの者ではない。

――放浪者？

警戒心が一気に膨れ上がる。群れを持たないオスには素行の悪い者も少なくないし、この足では抵抗のしようもない。せめて気

圧されてはいけない。

そう自分に言い聞かせながら相手の姿をまともに見て、しばし思考が止まった。

美しいオスだった。

豊かで艶のある毛並みは夕暮れの光を受けて淡く金色に輝いて、均整のとれた体軀は大きすぎず、でも芯のある力強さがあった。何より——深い琥珀色の瞳が、まっすぐにこちらを見つめている。

その目には蔑みも、同情も、値踏みする色もなく、ただ——じつと、私を見ていた。

沈黙が数秒。風が木の葉を揺らす音だけが流れた後、先に動いたのは私だった。じりっ、と後ろに下がると、傷ついた足が枯れ

枝を踏んでばかりと乾いた音を立てた。

「逃げなくていいよ」

威圧するでもなく、媚びるでもない、ただ事実を告げるような穏やかな声が落ちてきた。

「……な、何か用？冷やかしなら、帰ってくれる？」

精一杯、声を尖らせた。弱みを見せてはいけない。舐められたら終わりだ。こちらの敵意が不思議でならないというように、オスは小首を傾げた。

「困ってるんじゃない？」

「……っ、関係ないでしょ、あんたに」

「いや、ちょうど余ってる獲物があるから」

「……余ってる？」

思わず聞き返していた。この時期に、余る？しかも見知らぬメスに分け与えるほど？

オスが顎でしゃくった地面を見ると、丸々と太った川魚が三匹、きれいに並べてあった。鱗がまだ濡れて光っている獲りたてのものだ。

「俺はもう腹いっぱいだから、あんたが食べて」

「そんな……都合がいいこと……」

「それくらい、あるでしょ。同族なんだから」

あっけらかんとした口調だった。善意を押し売りする気負いも、見返りを匂わせる下心も感じない。道端に落ちている木の実を拾って差し出すくらいの気軽さで、彼はそこに立っていた。

……確かに、疑いすぎかもしれない。

一人で過ごす時間が長すぎて、誰かの善意を受け取ることが怖くなっていた。それに——正直なところ、もう限界だった。空腹が体の芯を蝕んでいるし、ここで意地を張って倒れたら本末転倒だ。

「……ありがとう。いただくわ。何も返せないけど……」

「知らない。なんにも」

おずおずと魚に口をつけた私を、オスは少し離れた場所に腰を下ろして見守っていた。

「……意外と律儀だね」

「意外とって……失礼じゃない？……礼儀だけは、ちゃんとしない。それしか残ってないから」

最後の方は呟くように言っただつもりだったけど、彼の耳には届

いたらしい。その瞳が揺らいだが、それについて何も言わず、ただ「そう」と頷いた。

「とにかく何もいらなから、気にしないで」

久しぶりにまともな食事を口にした。新鮮な魚の脂が、枯れかけた体に染み渡っていく。こんなに美味しいものを食べたのは、いつぶりだろう。

夢中で食べている間も、あのオスの視線を感じていた。じっと見られているのに、その視線には不快な重さがなかった。

説明しづらい。温かいと言えど近いのかもしれないけれど、もっと奥の方にある、静かな熱のような感じがした。

「あの……落ち着かないんだけど……」

「ああ、ごめん」

彼はようやく視線を外して、何でもない顔で立ち上がった。

「いつもこの辺にいるの」

「……そうだけど。それが何か？」

「いや、何でもない。じゃあね」

そう言って背を向け、あっさりと茂みの向こうに消えていった。
残されたのは、魚の骨と、かすかに残る彼の匂いだけ。

——なんだったんだろう。

夜、巢穴で丸くなりながら考えた。あのオスの意図がわからない。見知らぬ、しかも足を怪我しているメスに獲物を分ける理由が思いつかない。

……もう考えるのはやめよう。きつと気まぐれだ。明日になれば忘れているだろう。

翌日。あのオスはまた食べ物を持ってやってきた。今度は魚に加えて、甘い木の実まで。

「……なんで？」

「余ってるから」

同じ答えで、同じ穏やかな顔。見世物だとも思っているのかと疑ったけれど、馬鹿にしている気配はない。目を合わせても、底意のようなものは見当たらなかった。彼の気まぐれがいつまで続くのかわからないけれど、断る余裕はなかった。

「……ありがとう」

受け取った。

翌日も。その翌日も。

四日目には、もう驚かなくなっている自分がいた。朝、巣穴を

出ると決まった場所に食べ物置いてあつて、少し離れたところ
であのオスが何食わぬ顔で毛繕いをしている。

五日目、とうとう訊いた。

「ねえ……どうしてこんな、毎日くるの？」

「嫌？」

「いや……っていうか、わからない。あんたの意図が」

彼は小さく首を傾げて、考え込むように耳の後ろを掻いた。

「正直、俺もよくわかってないんだ……あんたが気になって」

「……まさか、同情してるの？」

「いや、そんなつもりはないけど」

嘘を言っているようには見えなかった。だからこそ、余計に不可解だった。

同情でも下心でもなく、気まぐれにしては律儀すぎる。

「気になる」って、何？

でも——それ以上は問い詰められなかった。もし問い詰めて、彼が来なくなったら。

……怖い、と思った。食べ物がなくなることじゃなく、この不可解な温かさが途切れることが。自分でも気づかないうちに、私は彼が来る朝を待つようになっていた。

あのオスの名前を知ったのは、出会ってから十日ほど経った頃だった。

「そういえば、名前を訊いてなかった」

水場の近くで、並んで水を飲んでる時にふと思い出して言った。

「ナギ」

「……ナギ」

短くて静かな、風いだ水面みたいな名前だと思った。

「あんたは？」

「マオ」

「マオ、か」

彼が私の名前を呼んだ。ただそれだけのことなのに、不思議と胸の奥がざわついた。

「……じろじろ見ないでくれる？」

「ああ、ごめん。いい名前だと思って」

「お世辞はいいから」

「お世辞じゃない」

まただ。この真っ直ぐな目。冗談なのか本気なのか判別がつかない。

ナギというオスは不思議な生き物だった。

群れの話をして也要領を得ないし、この辺りの縄張り事情にも疎い。どこから来たのか訊いても「いろいろ歩いてたら、ここに着いた」としか言わない。他のオスたちが縄張りをめぐって睨み合っている、何でもない顔で通り過ぎていく。群れの中でも彼を気にする者はほとんどいなかった。

遠くで誰かが「あいつ、戦ったとこ見たことないよな」「弱いんじゃないか」と言うのを聞いたことがある。

なのに本人はまるで意に介さず、馬鹿にされても怒らないし、挑発されてもぼんやりした目で相手を見返すだけだ。

変な奴。

そう思ったけれど、不思議と嫌ではなかった。

それは、よく晴れた朝のことだった。

巣穴の中で丸くなって眠っていた。最近は少し肉がついてきたおかげで、前より深く眠れるようになっていた。

——ん……。

微睡みの中、ふと違和感を覚えた。巣穴の草から伝わるのとは違う、生き物の体温。息遣いが、すぐそばにある。

薄く目を開けると、至近距離にナギの顔があった。

「ひっ……！ な、何!？」

跳ね起きようとして、傷ついた足が軋んだ。痛みに顔をしかめ

た瞬間、ナギの手がそつと肩を押さえた。

「急に動くと、足に響くよ」

あくまで、静かな声で。

いやそうじゃなくて！

「あんた、何してるの!?なんで巣穴の中にいるの!？」

「入り口が開いてたから」

「それは理由にならない！」

抗議する私を気にする様子もなく、ナギはすんすんと鼻を寄せてきた。首筋に、耳の後ろに。温かい鼻先が毛並みの奥に触れる。

「やつ……なに、嗅がないで………！」

「やっぱり……この匂い……」

呟くような声で言いながら、ナギは金褐色の瞳を朝の薄明かり

の中でゆっくりと瞬かせた。

「決めた」

「……な、何を？」

「俺の番になって」

時間が、止まった。朝の巢穴に差し込む光の筋が宙に浮かぶ細かな埃を照らしていて、遠くで鳥が鳴いている。

「だっ……だ、誰と!？」

「マオ以外、誰がいる？」

「だって……私みたいなのは……足手まといに……!」

声が裏返った。自分でも情けないくらい動揺していた。こいつは、何を言っているんだろう。

本当に私を見て言ってるの？こんなに痩せて毛並みも褪せて、ま

ともに歩くことすらできない私を？

ナギは微動だにせず、まっすぐにこちらを見ていた。

「関係ない。俺がマオの面倒見るから」

「正気？ あんたみたいな健康なオスなら、もっと他にいいメスが……」

「マオがいい。それ以外は考えられない」

その声には一片の迷いもなく、まるで当たり前のことみたい
に言っただけだ。

「……っ、信じられないよ！ 知り合っただけだし……理解できない」

突き放すように言った。怪我をしてから手のひらを返したオス
たちの顔が脳裏をよぎる。毎日来ていたのにぱたりと来なくなっ

た足音や、目を逸らされた日の切れるような痛み。

簡単に信じてはいけない。条件が変われば、こいつだって心変わりするかもしれない。今は物珍しさと優しくしていても、いずれ――。

もう、傷つきたくない。それくらいなら、最初からない方がいい。

「……難しく考えることないのに」

ナギは困ったように耳を倒したけれど、傷ついた様子はなかった。拒絶を受け止めた上で、少し考えてから口を開く。

「じゃあ、わかった。俺が番にふさわしいか、確かめて」

「……確かめる？」

「マオの発情期が来るまで一緒に過ごす。その間にやっぱりナシ

だと思えば断つてもいい。その時は、付きまとうのをやめる」

淡々と、でも揺るぎのない声で言った。

「なんで……そこまで……」

「マオが欲しいから」

あまりにも真っ直ぐな言葉が、胸の奥に刺さった。

心が、本能がぐらつく。「このオスは本物だ」と、頭の奥の何かが囁いている。

でも——だめだ。

「……勝手にすれば。でも、期待しないで」

それが、私に言えた精一杯だった。

ナギは小さく笑った。初めて見る笑顔だった。口の端がほんの少し持ち上がっただけの控えめな、笑み。

「うん、期待はしない。でも、全力は尽くす」

それから、奇妙な共同生活が始まった。

番の見極め期間とナギは言っていたけれど、やっていることはほとんどすでに番のそれだった。

まず、食べ物。

ナギは毎日、驚くほど豊かな獲物を持ち帰ってきた。丸々と太った魚に甘く熟した果実、栄養のある根菜。ただ多いだけじゃなく、私が好むものをいつの間にか把握して優先的に集めてくる。

「……よくこんなに見つけられるね」

「コツを掴めばこれくらい簡単だよ」

何でもないことのように言う。「余ってたから」という最初の言葉は、もしかしたら嘘じゃなかったのかもしれない。このオスは

本当にこれだけの量を当たり前のように調達できるのだ。

食事だけじゃなかった。ナギは私の足の傷を毎日確認して、水場まで付き添い、体が汚れれば丁寧に毛繕いをしてくれた。怪我した足のリハビリにまで付き合って、「もう少し曲げられる？」

「痛かったら言って」と根気よく回復を支えてくれる。

最初は抵抗があった。誰かに頼ること自体を、もう忘れかけていたから。

「……そんなにしてもらわなくても、自分でできるのに」

「俺がしたい」

「……変な奴」

「よく言われる」

気づけば、抵抗する気力が薄れていた。

ナギの世話には押しつけがましさがなくて、私の自尊心を傷つけない絶妙な距離感で、生活の全てを支えてくれた。

ナギが食料調達に行く以外の時間は、ずっと一緒にいた。並んで日向ぼっこをして、木陰で風に吹かれながらたわいもない話をした。ナギは聞き上手だったけれど、自分のことを話す時は少し不器用で、言葉を探すように間が空く。その間がなぜか心地よかった。

夜は巣穴の入り口で丸くなっている彼の体温が、じんわりと伝わってきた。

——温かい。

冬を越える前が一番冷える時期で、一人で震えていた夜がどれだけあっただろう。いつの間にかその温もりなしでは眠れなくな

っている自分に気づいて、背筋が寒くなった。

慣れてはいけない。依存してはいけない。

でも体は正直で、ナギの高い体温に包まれると、張り詰めていた全身の力が自然と抜けていく。少しずつ、少しずつ――。

第二章 練習

共同生活が始まってしばらく経った、ある夜のことだった。

冷たい夜風を遮る巣穴の奥で、並んで丸くなっていた。隣にはナギがいる。いつものように。ぴったりと寄り添う大きな体から伝わる熱が、最近は当たり前になつてしまつて、この体温がないと落ち着いて眠れなくなつてゐる。

——こんなの、いけないのに。

暗闇の中でそう思っている最中だった。微かに差し込む月明かりを遮るように、ナギの影がスツと覆いかぶさつてきた。

「マオ……」

不意に、ちゅ、という水音とともに唇が塞がれた。ただ触れるだけのキスではなく、驚いてわずかに開いた隙間から、ナギの熱く湿った舌がするりと滑り込んでくる。静寂に包まれた巢穴に、生々しい水音だけが響いた。私の口内を隅々まで弄り、粘膜のひだまで残さず舐め上げていく、雄の匂いを孕んだ濃厚な口づけだった。

「ん……、ぷはっ！な、何を……！」

息継ぎの隙を与えられてようやく唇が離れると、私はナギの胸板を叩いた。頬が燃えるように熱い。

「番を見極めるためなんだから、こういうことも確かめない」と

「で、でも！発情期、まだ来てないのに……！」

「してなくても、練習はできるだろ」

「練習って……っ」

「こういうこととか」

「あ……や、ひううっ♡」

ナギの分厚く大きな手が、私の胸の膨らみをむにゆう、と掴み取った。毛皮越しでもはつきりと伝わる手のひらの熱さと、ごつごつとした指の節々が、柔らかな肉に深く沈み込む。たっぷりと持ち上げながら揉みしだかれ、形が歪めつつじっくりと捏ね回される。ずくずくとした熱が、お腹の奥からじわりじわりと広がっていく。

「発情してなくても、反応するんだ？」

「そ、んなとこ、急に、触ったらあ……ふ、とうぜん……！あ
っ……♡」

くにくにくにつ♡くにゅう♡

「あ……っ♡や……それ、やだあ……っ♡」

指の腹でゆっくりと円を描かれ、下から掬い上げるように揉み上げられるたび、甘い痺れが芯まで染み渡る。可愛がられた乳房が熱を持ち、柔肉が指の間でとろけるように形を変えていく。

「番になって、全然気持ちよくしてもらえなかったらどうする？
ちゃんと、試さない」と

「そ……んな……あぁっ♡先っぽは、だめえ……っ♡」

ナギの顔はいつも通りなのに、手つきはどこまでも執拗で容赦がなかった。私の弱い部分を初めから知っているかのように、指先が的確に気持ちいいところを撫で上げ、甘く焦らす。

「気持ちいいんでしょ？そんな声出して」

くりゆう♡くりゆう、くりゆう、くりゆう♡

ひととき敏感に硬く尖り立った乳首を、ざらりとした指の腹がこりこりと転がし始める。少し荒い指先で形を変えようとにしくく捏ね回され、チリチリとした焦燥感が背筋を駆け上がる。

「あ……やだあ……♡そこ、くりくりってするの……やだあ♡」

「こんなに硬くしてるくせに？」

ぐりぐりゆう♡♡こりこりこりこり♡♡

「ひいん……♡♡」

少しだけ爪を立ててカリッと弾かれると、電流のような快感が脳天まで突き抜けた。びくん♡♡と腰が跳ね、太腿の間が熱く濡れた感触を帯び始める。

「気持ちいい？」

「きもち、よくないい……っ♡♡♡」

「素直じゃないな……じゃあ、これは？」

ナギの顔が、誰にも触れさせたことのない乳房に近づく。熱い吐息が先端にかかり、ぞわりと肌が粟立つ。次の瞬間、頂きをぬるりと口に含まれ、ねつとりと舌が絡みついてきた。

ちゅぷっ♡じゅるうっ♡ちゅぷっ♡

「ひゃああっ♡な、舐めちゃ……っ♡」

抗議の声などまるで聞こえていないかのように、舌の動きが激しくなる。熱く湿った舌が乳首を包み込み、ちゅううっとして強く吸い上げながら、先端をぐりぐりと押し潰すように転がす。

ちゅぷちゅぷちゅぷちゅぷちゅぷちゅぷっ♡

くりくりくりくりくりくりくりくりっ♡

「はひっ♡それだめえっ♡だめなのおっ♡」

きゅうっ♡こりッ♡ちゅぷちゅぷちゅぷ♡

ぐりゅっ♡ぐりゅりゅりゅりゅりゅ♡

ごまかしようがないほどピンと硬く勃起した乳首が、時折チクリと甘く噛まれ、熱い舌でぬるりぬるりと絡め吸われる。さらにもう片方に指が添えられ、根元からすり潰すようにねちねちと刺激される。二重の絶え間ない愛撫に、逃げようと腰をよじるが、ナギのもう片方の腕ががっちりと腰を抱きすくめ、びくともしない。

「うあ……っ♡あーっ♡なんか、へんっ……♡」

「ちゅぱ……それを、気持ちいいっていうんだよ？」

「あ……、あ……♡きもち……きもちい……っ♡」

「ん、いい子」

蕩けきった私の唇に、ちゅっ、とご褒美のような甘いキスが落ちる。

「今日は、ここまでね」

「あ……♡終わり……？」

「……もっとしてほしい？」

「そ、そんなわけない！」

「ふ、そっか。じゃあ、また明日」

（また明日……?!まさか、また明日も、こんなことを……？）

翌日は、もう全然落ち着かなかった。ナギの顔を見るたびに昨日の熱を思い出し、体が勝手に火照ってしまう。

当のナギは、いつも通りの顔で毛繕いをしている。あんなことしておいて、こいつ……！

「どうしたの？マオ」

「な、なんでもない！」

ナギは、目を細めて微かに笑っている気がした。からかわれているのだろうか。

夜、並んで寝る時。私の心臓はうるさいほどに鼓動していた。

ドキドキが止まらない。

今日は……しないのかな。期待してるわけじゃないのに、身体の奥が疼いて疼いて、じつとしていられない。

「——期待してた？」

背後から、不意に抱きしめられる。ナギの胸板が背中についた

りと密着し、高い体温が一気に染み込んでくる。

「ひゃっ！」

そのままナギの手が前へ滑り込み、胸の膨らみを下から鷲掴みにする。

むにゅううつ♡たぶん♡むにゅむにゅ♡

「あ！また……！」

背後からの抱擁で身動きができない。分厚い手のひらが柔肉を深く挟り、ふにゅふにゅと揉み上げる。指の腹が沈み込むたび、形が歪むほどにたわみ、押し潰され、跳ね返ってナギの掌に吸い付く。

「全然嫌がつてるように見えないけど」

「そ、そんなことないもん！」

「じゃあ……こっちに聞いてみようか」

「あ、そこは……！」

足の間に、ナギの指がずっと伸びる。

咄嗟に太腿を閉じようとしたが、いとも簡単に割り込まれ、柔らかい谷間をくちくち♡とすり上げられた。

「ひ、…あ、あうう……っ♡」

ただ触られただけで、意思とは裏腹に、とろりと溢れる蜜が指に絡みつき、卑猥な水音を立てる。太腿の内側はもうぐしよぐしよで、滴が伝う感触まで生々しく感じてしまう。

「すごい濡れてるよ？やっぱり、期待してたでしょ？」

「そん、なこと、ないもん……っ♡あ、そこ……♡」

「マオ、かーわいい」

「そ、そんなこと、言わないでえ……っ♡」

「こーんなにかわいいのに？」

くちゅっ♡くちゅくちゅくちゅっ♡ぐちゅうつ♡

「あ、あっ……♡そこは、ああ……♡」

ナギの太い指が秘裂の入り口をゆっくりと撫で回すたび、たっぷりと溢れた蜜が絡まり合って、ぬちゃ♡くちゅ♡と卑猥な水音を立てる。ぬるぬるとした熱い感触が、秘められた粘膜を刺激し、ぞわぞわとした快感が下腹部を這い上がる。

「足、開いて？マオ」

「あ……や、やだ！ぜったい、やだ……！」

「じゃあ、こっち触っちゃおうか」

くりゅんっ♡

「あひ……、あ、ああ……っ♡」

隠れていた敏感な芽を、ナギの指先が的確に捉えて弾く。全身の毛が逆立つような鋭い快感に、力の入らない太腿がびくびくと甘く痙攣する。

「ほら、ここ。マオのクリトリス。スリスリされてるの、わかる？」

「わ、わかんない……っ♡」

「ふーん、じゃあ——これは？」

くりゅううっ♡ぬちっ♡ぬちっ♡ぬちっ♡ぬちっ♡

腫れ上がった肉芽を指の腹でじつくりと押し潰され、ぐるぐると円を描いて擦り回される。強烈な快感の波が下腹部を直撃し、腰が勝手に跳ね上がる。

「お、おおおっ♡それだめだめ！だめなのおっ……♡」

「何がだめ？ちゃんと言って？」

「そこ、触るの、だめえ……っ♡」

「どこを、どんなふうに触るのがだめ？」

ぬぢっ♡ぬぢぬぢぬぢぬぢっ♡

「ふぁ……あひっ♡そこっ……♡そこお……っ♡」

蜜をたっぷり含んだ指が、肉芽を根元からぬちゅぬちゅ♡と執拗に擦り上げ、時折爪の先でカリカリ♡と軽く引っ掻く。びりびりとした刺激が頭の芯まで突き抜け、息が荒くなる。

「ちゃんと知らないとわかんないよ？マオのこのかわいいクリ、どうされるのがだめ？」

「マオの……っ♡~~~~ツ!!やだぁ……っ！やっぱり、はずかし

いっ♡

ナギの意地悪な問いかけに、首を横に振る。そんなはしたないこと、言えるわけがない。

「じゃあ、続ける」

ぬちやっ♡ぐりゅうつ♡ぐりゅりゅりゅりゅりゅっ♡

「あ——っ♡♡♡なんか、なんかくるうつ♡なんかきちゃう…
…っ♡」

「ほら言って。何したらやだ？」

「あうう…っ♡マオのクリをお…っ♡あああんっ♡」

ぐりゅ！ぐりゅ！ぐりゅ！ぐりゅ！♡♡♡

指の動きが一段と激しくなる。腫れきった突起を容赦なくゴリゴリと押し潰し、素早いストロークで何度も何度も擦り上げる。

蜜が飛び散り、太腿を伝う音まで淫らに響く。あまりの刺激に呼吸が乱れ、快感の波が下腹部で弾けそうになって、つま先が勝手にぎゅっと丸まった。

「――言えよ」

いつもより低い、オス特有の掠れた声が耳朶を打つ。背後に密着するナギの体が熱く強張っているのがわかった。もうだめ、言うしかない……！

「マオのクリ……っ、ナギの指で、くりくりされるの、やらあっ♡おねがいい、ゆるしてえっ♡」

「いーこ。よく言えたね。……じゃあ、初めてのクリイキさせてあげる」

「う、そ！やめるんじや……っ♡」

「やめるって言ったっけ？」

「ひどっ♡ひあ、あゝゝゝっ♡♡♡」

ぐっちゅぐっちゅぐっちゅぐっちゅぐっちゅ♡♡♡

一番敏感な先端のキワを、指の腹で何度も何度も追い詰めるようにすり潰される。蜜が飛び散る水音とともに、目の前がチカチカして、頭の奥でパチパチと火花が散った。

「あっ、ああああ♡♡♡もう……らめえ——ッ♡♡♡」

ぴくんぴくんぴくんぴくん♡

ピシャピシャ♡プシャ♡♡

「あ、あ……もらし、ちやった……」

快楽の津波の直後に起きたそれに、絶望的な羞恥が私を襲う。ビクビクと痙攣する太ももの間から、温かい飛沫が勢いよく噴き

出した。でも、ナギは嫌がるそぶりも見せず、私の飛沫を優しく指で掬い取った。

「潮吹きつていうんだよ。マオがすつごく気持ちよーくなった時に出るから、恥ずかしくない」

「うう……ナギの、ばかぁ……っ♡」

「マオ。番になったら、毎日こうされるんだよ？」

「えっ……こんな、ことを……？」

「そう。発情期になったら、毎日こうやってマオのクリぐちゃぐちゃにいじめられちゃうんだよ？イキすぎておかしくなるくらい、何度も何度も」

ナギの瞳が、夜の闇の中で爛々と光を帯びていた。

「ひいんっ♡だ、だから……？」

「今のうちに練習して、慣れとかないと」

「れんしゅう……?!」

「発情期で敏感になったところで、いきなり理性を失ったオスにめちやくちやにされちゃったら、それこそマオの頭、馬鹿になっちゃうかも」

「う……」

よくわからないが……そういうものなのだろうか。

「ほ、ほんと？」

「本当」

振り返ってナギの表情を見るが、いつも通りの顔だ。読めない。読めなさすぎる。

「じゃあ、また明日」

「またあ……?」

そしてそれは、私たちの習慣になった。

毎日毎日、ナギの指や舌で私の体は隅々まで開拓されていく。
ただ、最後まで挿入することだけはしなかった。それが余計に、
私を狂わせた。

「あ~~~~~っ♡そんなに、おまんこぐちゅぐちゅしちゃ、だめ
えっ♡♡♡」

れろれろれろっ♡じゅるるるっ♡

ぐぽぐぽぐぽっ♡じゅぶっじゅぶっじゅぶっ♡

仰向けにされた私の、大きく開いた足の間にナギがすっぽりと
顔を埋め、赤く熟れた突起を舌でぢゅるぢゅる♡とねちっこく吸

い上げる。それと同時に、蜜でドロドロに溶けた柔らかな奥の肉壁を、彼の太く節くれた二本の指がじゅこじゅこ♡と激しく抉り、かき回し、容赦なく突き上げる。快感の洪水が押し寄せ、絶頂の高みに連れて行かれる。

「あ、イクイクイクッ♡♡♡」

びくんっ！びくびくびくんっ♡がくんっ♡

「ん、じょーずにイクイクできたね。かわいい」

「言わないれえっ……♡♡♡」

たっぷりと私の蜜を吸ったナギが、糸を引く唇をゆつくりと離し、荒い息を吹きかけられると、吐息の熱がびりびりと子宮まで響く。

「マオ。番になったら、マオのトロトロまんこを奥の奥まで……」

今度は俺のぶつといちんぽで、どちゅどちゅ♡つていーっぱい突いてあげるよ？そしたら、指よりもっともーっと気持ちよくなれる。だから……番、なろ？」

「ひい いっ♡じえったい、やだっ……♡」

「なんで？」

ずちゅんっ♡

二本の指が、咎めるように奥にあるとりわけ敏感な壁をドスツと突き上げ、そのまま螺旋を描くように袂り回す。内壁が指に吸い付くような感覚がじわりじわりと伝わる。

「これいじよ……気持ちよくなったらあ……おかしく、なっちゃううっ……♡」

「おかしくなってもいいだろ。おかしくなつて、気持ちよくなつ

て、バカになって、アヘアヘ鳴いて……ただ、俺だけに愛されて
ればいい」

「そんなの……だめだよお……っ♡」

「ダメじゃない」

ずちゅちゅっ♡じゅぼじゅぼじゅぼ♡

「ひゃあああっ♡」

指が激しく抜き差しされるたび、巢穴中にいやらしい水音が響
き渡る。蜜が飛び散り、ナギの顎を伝って滴り落ちる。

「ね？番なろ？俺と番になって、毎日毎日、溢れるくらい、マオ
のまんこにびゆるびゆるっ♡って俺の種を注ぎ込んで、マオに似
たかわいい赤ちゃん、たーくさん作ろ？」

ナギの低く艶やかな声が、呪いのように私の鼓膜と子宮を直接

震わせ、とろりと新しい蜜を溢れさせる。

「きやうううっ……♡」

「どうする？マオ？」

「……やだっ！」

「……ほんと強情だな。まあ、マオらしいからいいや。……じゃあ、俺にまんこしゃぶられてイケ」

「あっ♡あ、あ、あ、んあ~~~~っ♡♡♡」

ちゅるちゅるちゅるっ♡♡♡じゅるるるるるっ♡♡♡
ずちゅずちゅずちゅずちゅずちゅずちゅッ♡♡♡

外の突起は熱い舌で強く扱きあげられ、内の粘膜は太い指で奥深くを何度も何度も突き上げられる。両方から同時に容赦なく責め立てられ、声を上げる間もなく、絶頂の波に飲み込まれる。視

界が弾け、頭の芯が爆ぜ、身体がびくんと痙攣する。

それでもナギは指と舌を緩めず、波が引く間もなくさらに攻め立て続ける。思考が溶け、意識が飛ぶまで、数えきれないほど果てさせられた。

そんな日々が続き、最近ではナギに触られるだけで、じゅん♡と蜜をこぼしてしまうほどになってしまった。

足腰がますます立たなくなった私は、本当にナギなしでは生きていけなくなりそうなところまで、心も体もドロドロに溶かされきっている。

だめだ。これ以上溶けたら——もう、戻れなくなる。

それなのに、毎晩彼の体温に包まれて目を閉じると、拒む理由を思い出せなくなっていく自分がいた。